



安城市の安城特別支援学校高等部三年生のうち、就職を目指す生徒たちの企業での現場実習が六月中旬から始まった。生徒は「普段通りの実力が出せるように」と面接練習にも取り組み、企業側は「不安なく実習できる環境を」と準備を整えている。(四方さつき)

7月・企業での実習 ①

事実上の入社試験ともいえる企業実習の受け入れ先がなかなか決まらないなど、就職活動はコロナ禍で大きな影響を受けた。今年三月時点で企業への就職を目指す約二十人の生徒全員に実習先のあてがあったが、コロナ禍でほぼ白紙状態になった。感染拡大に伴う全国的な規制が緩和された五月末時点でも、実習が決まっていたのは六人だった。一時は教職員に悲観的なムードが漂った。しかし生徒のこれまでの努力や学校側からの粘り強い働き掛けが、事態を少しずつ動かし、

七月七日。「六月中旬か

面接練習 教員たちも熱



①実習に向け、黒岩教諭と面接練習する生徒たち
②林教諭も企業での実習について確認する鈴木さん。いずれも安城市の安城特別支援学校で



残る三人のうち一人は、二年次の実習が評価され「就職に結び付きそう」。あと二人も面談が予定されるなど前へ進む。説田教諭は「生徒ができる仕事があるか、実際に職場を見せ

てもらって話し合っなど、地道に関係を築かせてもらったおかげ」と感謝する。目の前に迫った実習に向け、生徒たちは授業で面接練習などに取り組んでいる。六月二十一日に授業で行われた初めての面接練習

では、緊張のあまり右手と右足が同時に前に出たり、扉をしつかりと開ききれないまま入室しようとして肩をぶつけたりする生徒が続出。担任の黒岩愛里教諭は「目を見て話すと、真剣な気持ち伝わるよ」「大返して練習する。全員がし

っかりと力を発揮できるようにと、教員たちの指導にも一層の熱が入る。実習を控えた生徒には、職場でのやりとりを念頭に個別指導もする。二年次と同じ企業での実習を七月末に控えた鈴木啓太さん(17)は七月七日、担任の林正記教諭と向き合った。

林教諭は職場までの行き方や服装、持ち物などを確認した後、「実習中の目標を教えてください」と質問した。鈴木さんは「二年生の時の実習では、もっと作業スピードを上げようと言われました」「今回はチームで協力し、声を掛け合って作業したいです」とはきはきと答えた。

「学校の実習でも皆に積極的に声をかけてくれるよね。失敗しても大丈夫。頑張ってください」と励ました林教諭。鈴木さんは「緊張しますが、頑張ります」と笑顔を見せた。



希望理由などを書き込んだテキストを確認する生徒